西洋道中膝栗毛

七編 上

へ14
1260
13

四へ 13
1260
13

假名垣魯文作
蕙齋芳幾画

西洋道中膝栗毛

七編

東京書肆
萬笈閣

西洋道中膝栗毛七編序

我皇國文字假名の初めを
難波津の歌とし寺文字の初め
山路登るものの人数香髪の法
戯作の乃を濫く好むを
主とし上手とそ
去年の秋

書肆より左伝を西洋道中とかん
ゆる稗史を綴りかきめぐりて萬里
の情景窺ふに便宜邪を洋典和漢
を引用ゆるゆ皆を隔てこゝろもち光
堪ゆる心地せり稗史を筆を下ぐ
を風の赤ゆる間をゝゝ僕前の

季法朗西有る博覽會へ行をを
を海路印度を経て洋の海を過ぎ
て港を赤とを既略一見ゆ大きに東
京に上り際魯文兄を訪きて
拙稿を一日をを花街に夜を
語りの他しをし別ぶ所へ越向の

空有りぬる所の最寄りの夫
に関みて序甚だ曲尽
に記さんに特に以て蟹文字の
横灣人豈の所為ならし

明治四の年
辛未夏六月

砂燕 白琢

東海の故国を放きて航海の船路よ趣向
定飛脚の幸便い世界第一弥次馬の滕栗毛

萬國航海 西洋道中滕栗毛 七編

西洋の各國を巡りて鐵道の蒸車ふ乗組
博覧會の僥倖い文明開化北八駿の滑稽者

假名違片言附 訛語雜字俗用集

萬國航海　西洋膝栗毛七編換釵

い

一世代。越後。遺趣。一盃。一枚。委細。犬糞。

縁喜。豌豆。ろ

呂律。論外。は

盤臺。初鰹。

張替。磔野郎。半死半生。ほ

煮焼返。三個四。

個。へ

細。法外。法印。灰吹。這入。

ぺらぺらもんめ

ト

何奴。土左兩。洋銀。土臺。燈心。ち

珍室。

縮丸。畜生。り

慮外。理解。留飲。ぬ

不飲不食。

盗人。る

已。阿乳母。御前。教。脊。伏狼。わ

私。

可笑。壮年時。か

乞丐。風邪。無構。よ

酔。寄合。

夜一夜。た

魂。大願成就。澤山。太閤。れ

來年。頼

光。そ

惣体。左様。為つ

附合。穿倒。宥。ね

内乱。

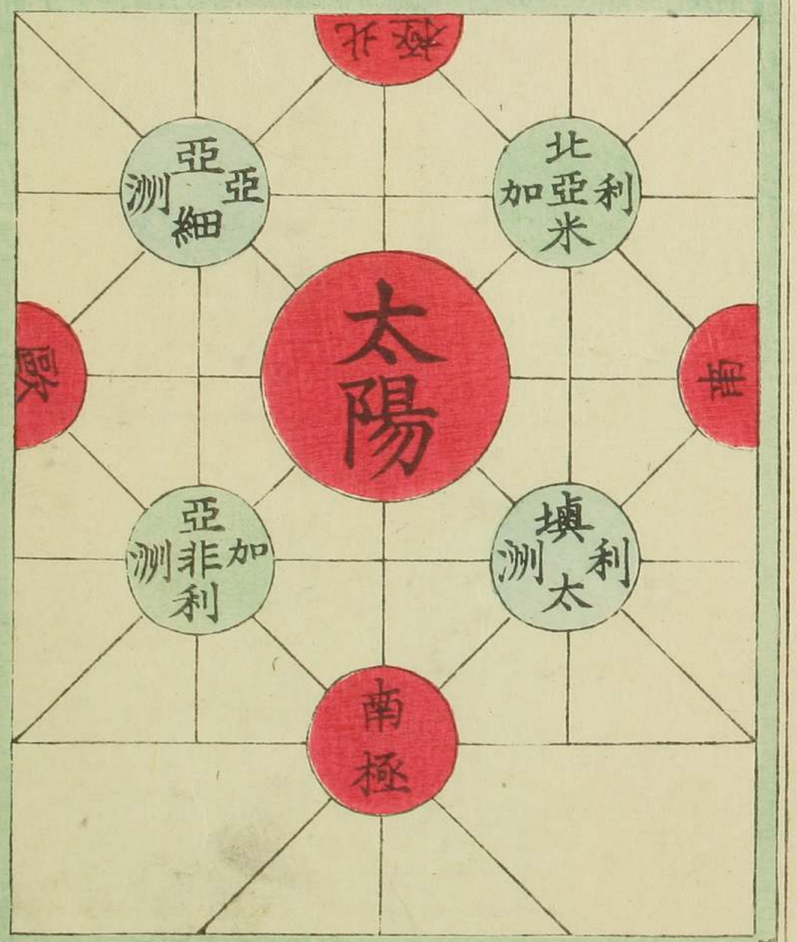
内證内陣（ナイシヤウナイチン）
（な）生醉難題何分。（ら）乱離奥廢無的法無闇滅法界。（う）自惚己等住味。
疑右大將云天萬里無誕喜祝（ゐ）（の）（く）
黒坊暗臭ユ合惡。（や）病厄介野菜物。（け）真
盈間真暗闇万歳未真直（ふ）帰蛙外聞。
返藝者開山會所買物。（こ）太踏縛打敲。

不器用。（え）拵御安桑（ヒ息）（て）天狗天笠
天災（あ）行燈早朝餅甘（さ）散賊三界山
内（き）氣違昨日彼奴兄弟気障（ゆ）湯屋
夕辺云（め）毎日毎度（ト モ マイ）参面例臭無面目目出度
滅法界蝸牛（み）皆化粧無見度微塵骨灰
（し）芝居商賣脊負込（ゑ）音信不通（ひ）百

人一首。懾慄。ひ 室町。萌黄。せ 雪隱。全體。催
促。戈六。上戈六 戈蔵。寂初。西行。錢。す 七轉八倒。
水天宮。始終夢中。不濟。寸白。直通。筋違。
○此余愚咲まるを。おひやらうも。又ちやうも。或いひやかもと云十方
もあるを。さんざもぬ。魯鈍を。ろねけ。とんちゑ。どんる。半る。半可を
あまるぎ。きりつるう。出過を。ゑね。飛あぐり。黒飛。都合をさん。ちん。ゆり
ろう。へららひを。どまるをする。等さめぐ。あれども方言をのを茲ふ挙

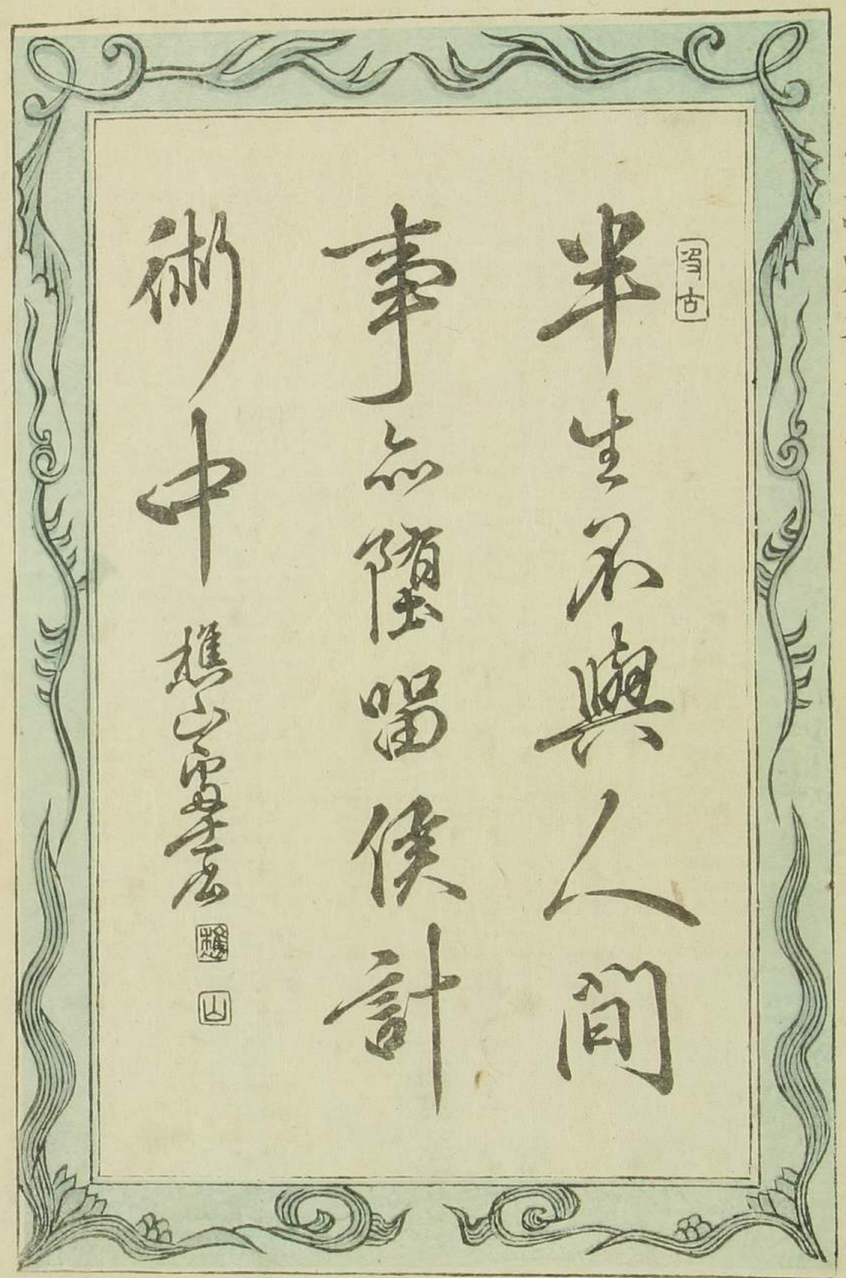
皇和 明治辛未初夏 假名垣魯文戲記

航海一家九族與題



通次郎
廣蔵
太平海
下男供七
於茶味

弥次郎北八
於鄙
商吉
あれくう海
於まさ



西洋道中膝栗毛七編上

東京　假名垣魯文戯著

地球自ら轉りて一周をなれば晝夜を生じ太陽を繞ること一周すして一年とする説あきらかふりてより人のこゝろ活潑なる元日から大晦日の日拍りを翼へ暮れば起るの活計を翼ふこゝまでこゝを用ひ利を得る的い光陰の矢よりも疾き一年化の人意彼光御紙より奮起する情覽舎の

日本人多い慈善の為勢賀しきに不堪の紅
路百里ふるに僅よ十日紅九日間ゝ海上
亞東ふ市波海の大洋をうちをぶく紅海の入
口ふある「アデン」といへる地よ着せり此地も英吉利の
領ふふく時候い寒暖あるどより暑く去地柄
至てよろしからぶ草本おく人の数一万人余
商賈も繁昌せぞ唯兵御紅るどへ石炭を積
とゆむ用意をあるをたゆのをされば此辺を渡海する

紅セイロンを出帆してより印ふ立寄べき港ふ
きゆへ物をもあふ碇をおろし泊らざるうの色
といへり

右い西洋旅案内の書中より抜出しく
彼国古の聚略を結せり然るふ注日の新
制輿地誌畧を披読するふ亞細亞洲の
部亞拉比亞の條ふ曰ふ○亞丁の地方ハ
紅海の入口ふ在り三十一年前より英国ふ

屋し歐洲より東洋ふ往來する船舶紅海暹羅の地より故ふ漸ふ繁盛し近家ふ多人口ふ至るを云々暹ふふ藤樂内の説と人口の異同あるとて彼方の著者福沢氏の歐羅巴ふ説海せられい文久三癸亥年ふして今より次前十歳の星霜を經て夢て響地誌略い方今の新聞を交てる當年の新出はて

各國開化日ふ進むの時勢猶人種蓋陸路日ふ為るべしら撰尚地の情景を得るふ為ふ及びくこの一冊ふ繁雑しゞ児戯の小冊ふ似く事實ふ考据せんも不得滑稽の下のちら特号して功名ふ為ふ及ぶ書の中庸ふ云て能加減よゞ為るを左の如し

扨も大抵屋の廣義の一辯ハ私をよりて亜丁の

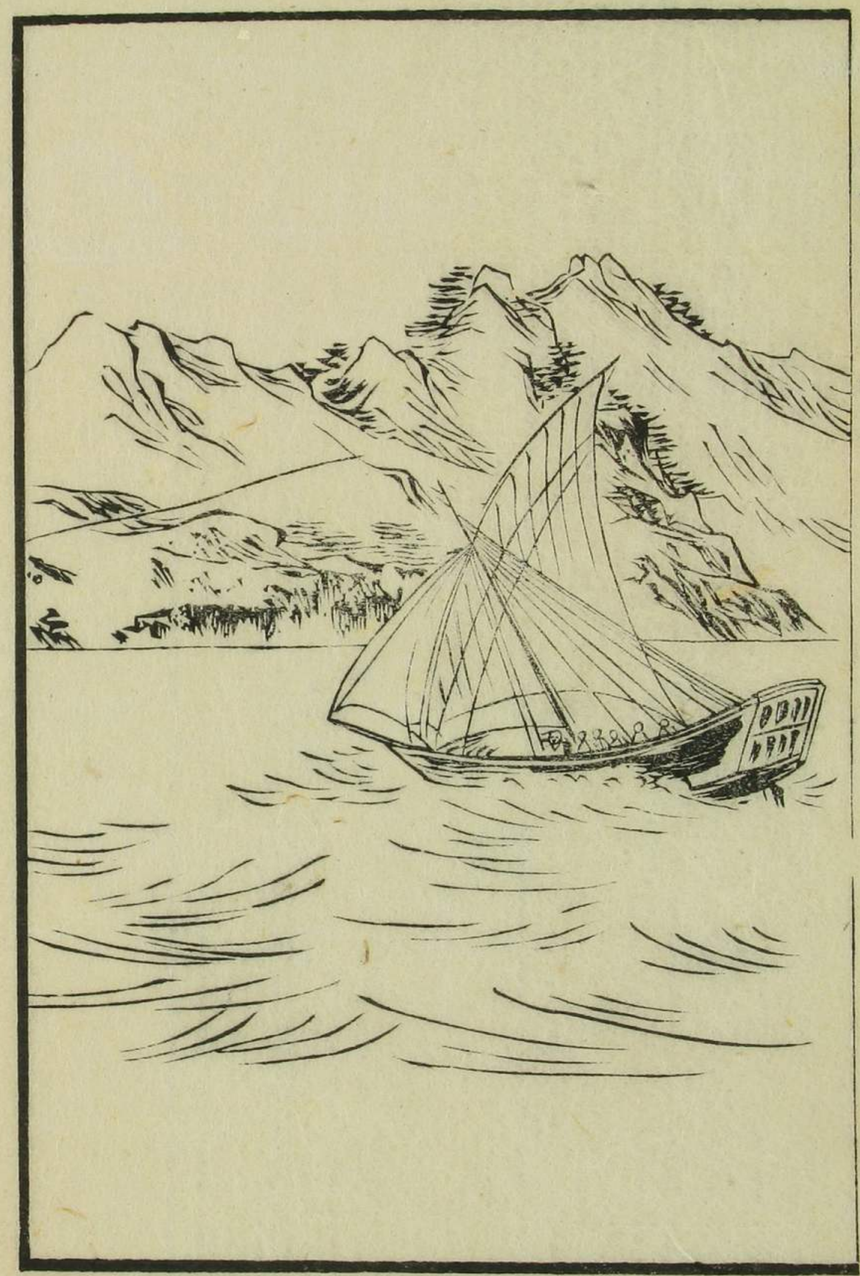
地図旅者よ見て休息のあひだも船の泊港
部和八雲も合口の通路部と三人よれば文殊の
智恵辯才と地理を便りとし英人「モテル」の
案内ふひらを贈さふめげぞ勝者武たちのでで
交渡知とる勇者ぐら港ふ碇泊の各國軍
艦発御船高い船をうちるぐめ又の船の逆速
を見やりて
船足のをそれて潮と乗込る

紅海さそよたる入港
到部部の口ぎさむを八時とりのくぞ
航海いちもかこれ船足も
利よそる世の高貴注来
通路部入港の祝炮とき蒸氣船の烟潮く
臨まるを眺めて一首の狂詩を吟ぜ
泊亞丁洋　做頼山陽先生天草詩作
蜘耶蜂耶巣耶網　仰天砲發声一喝

蠻夷泊舶亞丁洋　烟横帆頭火漸滅
遠見水夫檣間登　外客渡海沖似浮

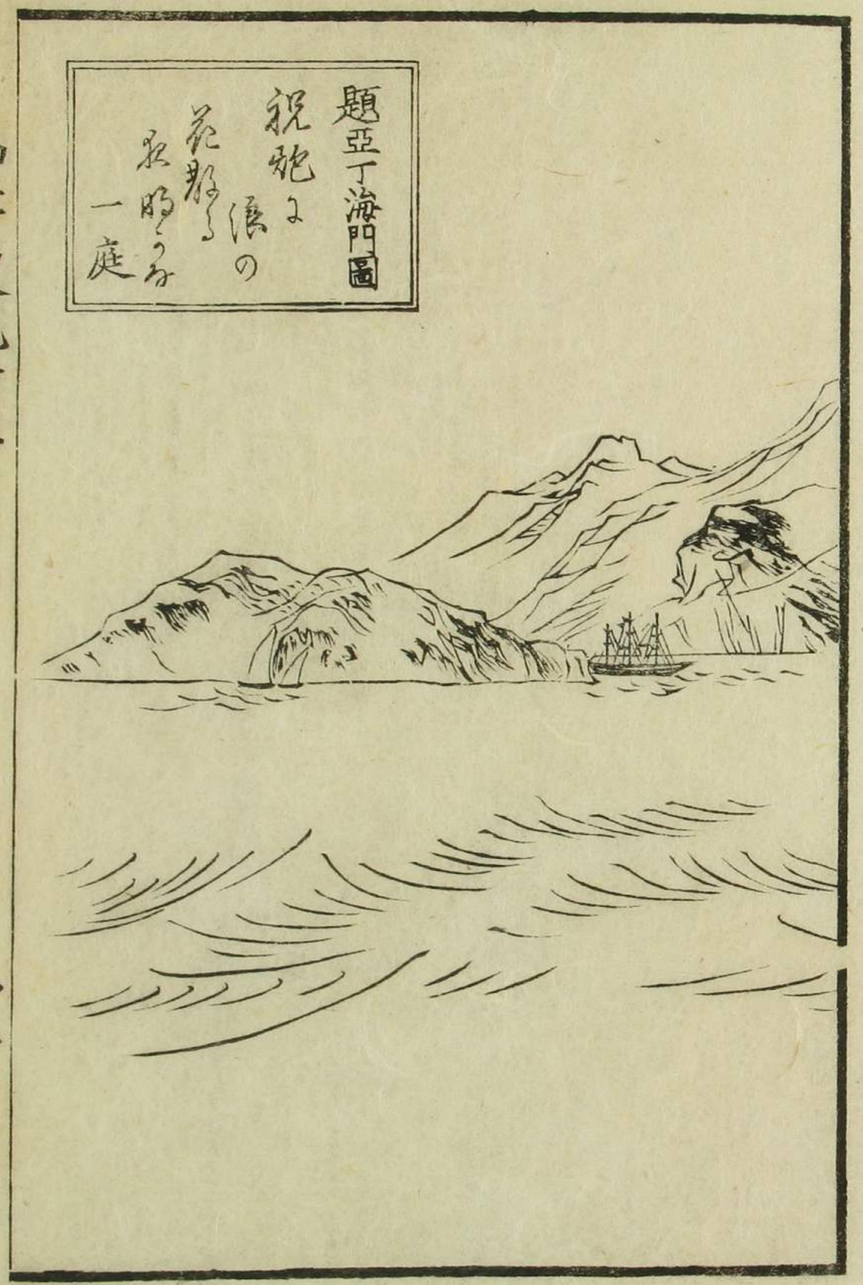
北通さんあめくの月落からもるきゝ唐人の森
どとを都通ぐきく ゆうぐぜゆンのことぐう
さうぞりとらねくうら威ぎるゆもあまりぐ強く
ヨ通ハアあめくのゆうる亜学文育ゆやアとうる
めくぐ濃ぎうぐ吹きやア威ぎるふなまりあるのサ
北ゑんのめのきりぐ吹イたとうく物ぐの婚だ

のと虫づくしの附含ゑんぎアなんまりかん
ぎるのめもあるめくあらッチヤアそんみとうら
ねくとこいさらんぢアで森聰先生大屋の裏
住右屋の飯盛えの亜阿弥智恵の肉ふ阿ン
ぞとらゆ天陽ぶりの名人達走去健はして彩ゆ
粗家ぐいうまいまうらに調ぐ強くッうくだまふ
でも見ッうく面白がらもる知ぐ妙ぎやア稼人ろ
通ッうンあめくひとうぐをも去ろからうが僕



題亞丁海門圖

祝祀よ
張の
花形ゑ
表明ゑ
一庭



あんぞうきらいちやアこれやまでの粗ぶうぐをも云
ろいと出ッたのハ一ッもねへヨ北〳〵そりやその乃ち
這入ハ移人ぎやアをの者ろこハ移人のサ通〳〵ハこア
侍人こなのいぎこハ詩を就ぎるとあるまこうこ北〳〵
それまこちんぷんかんダ通〳〵ちんぷんかんをろふ
あをばろりッ北〳〵十二口合ろ者やれるら此方の
はをまのめダ通〳〵者やれるらごぎれるびくべイ北〳〵
るびくい者をこのろまどの通〳〵のろまふあもし

ぶあるのろ北〳〵アく悪イ〳〵おあくのいこんるかぶり
とりふのこで美魯や空第点ぎやア垂口だせ通〳〵こ
よく他のこと云雅非をいのぶおあくの結ぎやれハ
拙ぶ〳〵北〳〵弱者やれの拙い私ろる通〳〵人情顔イと
者やれつけろぶ喰いろくあきれらアト女人あろら口合
くとのれをぶころぶれ跡に部とモテルをえくふ
みふろいろげもろくぎらぶせーやとたちどまる変ホ弥に部
とモテルのふころいい北八と通に部がくぶらぬあとを
海ーあぶら夏ちやホ汚をぎる跡ようぶらく〳〵

あるきながら　弥「ヲイモテルさん亜丁娘助玄濤(あでんむすめすけべゑ)ありますか　これハこの土地に縹緻女のたぐひがあるかといふ　モテ「むすめや助(すけ)べゑハたいさんありませ　弥「あるくとうしもけべゑがありまするろ〳〵　モテ「よろ〳〵　弥「とんぺらに　北通次郎八「さらんそア

ペケ〳〵　かの支人ハますます〳〵おもひこのふくりにてやらうと云　モテ「よろ〳〵　トきゝにはなちてこゝかしこの町のようこちへくれるゆゑ弥次郎もおもしろくてあゆみをゆくとモテルハある食物をせの門にたぶをさ　モテ「あるく喰(ちやぶ〳〵)る

ありませんか　弥「ともし空腹(くうふく)ありませ　モテ「此(この)店甚廉価(まこやすい)　弥「よろし〳〵　トうちつれだちてかのちやぶ〳〵やへきたるところの家ハ当地の人よ

ちてなにれも男女こゝろんぶありモテルハ弥次郎をあんないしてよきところにせきをまうけねもふかゝり食卓をまへにしてさけさかなをあつらへるにならどうかのちきたり支人からどう〳〵ゆら〳〵酒気をひくへのこゝろけるに弥次郎もモテルもだん〳〵と気がなぐさみ　弥「アゝいゝところへもちにならッてきた暑気(しよき)をはらひハ酒(さけ)のことだ　モテ「モシあるくどろんけんありますかもとうし　どろんけん〳〵　モテ「もとうしどりんけんたらさんありませてフアッ〳〵　トたうどゝ君ゆてなにやらいふうちにさいしもる弥次郎もいろ〳〵　弥「アゝこりやア〳〵〳〵　ト字あまりどうらう　ちぢれ髪(かみ)のざん切(ぎり)あたまをまるでぐる〳〵剃(すつ)てかゝ手に

扨ンどン羅安同(あやめんど)あてまだらしくと。たくさ付(つけ)
きバあたりあや あきれてちゞれさ毛(け)だらけ。とまと
からさわく浮気(うはき)をまると鈍鈍(どんどん)けいさや この小戸(と)ーの
よくらピイし どんどこでんでけでん。潤絲見(てうもんあし)なとく
背青(くつむこと)ポコ〳〵
これをきゝてあらましおもうと
ろうくぐぎゆうきんるとおきて
小たいぶんたいれぢめんと
ちたもうらとあのますト
モテ〽ファハヽヽ 化(ばけ)て出(で)る力子(りきし)
面
なもくれ〳〵
黒
モシ あなさ 亜丁(あんでん)藝妓(げいしや)あり まゝそろ
トろち ちらべ
弥〽ア
モテルハ
モテ〽げのあやペケ〳〵 今日(こんにち)暁(くれ)気 まゝまそけ べき

まろろしよろし
弥〽ヲツトそのこと 招飾(てうだうり)お箇ツ
跳(びつこ)すけべゑよろあいまろろし
トモテルふきとく
ろかんせうそふら
ひるまをひきあるて
よろしたちのぞ 娼(よね)きげんあて 安(あやうく)ちのよく目(ひ)いくまと
たまどそらされ見てつり 満月(まんげつ)なるぞさしのがり
て篁(ひら)を熟(おぼろ)〳〵たりなれバ 従来(じうらい)の自由(じゆう)を得(え)さ
り
かくて弥次郎ハモテルのあんなひよりとかのきう
えるふらの〳〵へあやうなちらいのそん中い女色と
ゝの不腹幕とてねのゆて小家の方だちらぎの
日ぷんのつと雑(ざつ)とや俗ふりふとちるとのつの
りてんまとろけてのぞきたりひッそるこ と日本ふ
ろ〳〵さればもギウなどろ〳〵る男子ハつぎらぐまも女人の
モテルハ ○

モテル

弥二郎
題銜賣女色
煩悩の犬に
ひかれてよるの苑
魯文

弥次郎とびをこゝろみるごとくかし（モデルの）こゝろみるゝらあてんめいあい。
こゝとゆらゑのまゝをひやしあるごとく
がをへんとをめん。わわわわ。らあてんめいあい。
わをへんこをめん。わわわウ引　とれいあねさんきみさい
トいふこと　こゝび「わゐッといをぜふらゐもあふいっとねだんい
いくらである　女「バウント。アホワルジユポイズ　バウントい英国
とき　く　アホワルシユポイ　のつうようを報まそ
ズハ重ケ　日本の百匁六分ニ當る　モデル
ペケ〳〵　トあたすだそのとあるうち弥次郎いさい
　若うの如ようつまりてふあのうちくひたぎりとまれふりのぎ
りてあめんとまるよひつるうようまるうちあのかぶせられ
あいちうぎれてねだんもきあぞついちちんのまゝ用をく〳〵ホドルラル

一片をとりいだしとれをあたくてたちのぞんとまるふあの女これゆとも
ふそくあるとりみをまゐをして大トルラル四片をとゝせといふそぶり
あれば弥次郎あれきふあどろ紀たるいさい者よたらのうちふたるそ
ゝりてゐるくふのようたりひろたりいそぎゝそ銀一朱つゝとせば上きゐく
あり小ドルいかれとれゐるくふの一分ぐらいのふつくあ弁とくだけ
よりどゝろ紀とゝろあるをふせゝうちのうく大ドル四片よゝとせといれ
びつゝ紀とくあつけふとられいぐぜんとかんぐくしがモテルをよぞんふ
もとゆのうちゆあいとゝろふまうゝせぎいつそのゝきれあひてい女のこと
ふりきりてあげいぐさんとあさくたるそぞをうぎこをさんとあせるわ
どふとの女だりりきあてあるく〳〵えるさぞゝろりつゝこたとあ上ヶ
女「スイーフ〳〵」　「ゆまびとと　とりふこと」　秋紀あ紀ちゝいせびあたりきんぎよの
きたりて弥次郎をあつとりまくふ女あぐらもたせのよぶぜいなふを
いのそもとゝびつゐからぞよんどゝろあくどゝらんのあっより四ドルとり
いゐ女ふゐたせびをぞやくひッとり　弥次郎をありてのくくたぜいより
てつゐだせびつきてゝびきれくゝろ〳〵たぢ〳〵あゝらのくでゆひぐ〳〵らよ

ゆうこうこうふうこうこうこうあぐらきあるひとふつきあるれがかのものゝ「ホワイ。
大きふらいしゆうもふて弥次郎がむるぐらをひっつかこうく
ドウ。ユウ。ヒユシ。ミー　あゝあるよるんぢいるれ　弥次郎
よつたあるうかとのこと　弥次郎
づたくびつくりし　ありがとつたのひくりふて　弥
かのものゝかれをうやうて　「あるく　モテ
ルさんまうろ〳〵どこあります　もとー〳〵あんどのあのひを
郎をすう　モテ　「弥次さんあるくすけべゑどこあり外
しるくく　るせべうのモテルも弥次
弥次郎かこの　弥　「ひるくし　すけべゑあまこあります
小やをあびざ　「
ゆうこと　たう　賃　ありまも　ドルラル　四　弗　さらんパア
モテ　「亜丁　助　べゑ　富　士　の　ゑ　ま　を　ゆ　じ　こ　と　あ　る　一　人
ふ　す　け　ら

すけべゑそこうありまもあでんむあめまこと
人　ひと　ひとりで　女をかいたるゆゑあでんの女いひとぶこるらら外あくの
ものゝとあるどこらまこくこよりたくくとられさのいのとこあまくが
ひるいからのこと　ありこと　とくじめたること　ことぞあり　弥次郎これを　嘆イ
たくくるこいもれどもりゆさらこうかくもひるゆゆ　弥ばうらあ
そうかこをんやりふさぎあぐらうちうち
つまだちまるよあくをじくかりこりちかくるをくるゆ　婦の
乃　ふ　ま　ま　ま
失　たて　立　の　ふで　筆　よ　ゆき　日　記　の　ぶく　洋　冊　に

たかりゆ　ごと　雅　むく　幕　のうちふめぐらさま
砂　そ　を　千　せん　里　よ　さらく　布　ぬの　の　小　こと　家　や

辻うらもモテルのあとふつきの夜や
嵐のやゝ吹ぬるこのうちち
形書つけゝくモテルとうちつまだち是だやふ
ゝを帰りうれ

西洋道中膝栗毛七編上ノ